

『「第四期岩崎式日本語」 大全』 別添資料(1)

Iwasaki's System of Reconstructing Japanese IV

一般学習者向け文法マニュアル

主格主語言語性の完成を指向する現代日本語を母語とする解離性障害者・言語障害者等の多種の非主格主語的な解離自己・放散自己・超自己による自己言及を可能とするための日本古語を基層とする後驗芸術言語としての新生日本語の考案、現代日本語及び当新生日本語によるこれらの自己に関する超言語学的・超哲学的・超精神病理学的・超数学的言明のイデアルな記述の試み、我々の涙と吐息への還元、そしてそれら全てへの情熱、東洋的実存の精神について

2005年11月24日 初筆

2012年7月29日 改筆

著 : 岩崎 純一

監修 : 岩崎式日本語研究会

協力 : 花薄会

協力 : 『新純星余情和歌集』全解釈プロジェクト

本稿では、初めて岩崎式日本語に触れる一般の方々に、その入門部分を言語学上の用語を用いず分かりやすく説明したい。入門と言えども、岩崎式日本語の本質は十分に記述されている。

まず、「岩崎式日本語」と名付けたからには、この試みは、主に「言語」ないし我々日本人の母語「日本語」そのものに関する試みであることは確かであるが、実際のところは様々な学問にまたがる試みでもある。

日本語、日本語学、言語学、日本語史、日本史、世界史、世界の巫女・シャーマンの言語、解離性障害、統合失調症、鬱病、自我・自分・自己とは何か、現行の学校文法・義務教育への疑念、東洋哲学、大乘仏教の世界観、英語教育の是非、英語帝国主義、不完全性定理、連続体仮説、コルモゴロフ複雑性、万能機械、ヒルベルト・プログラム、生成文法、Xバー理論、チューリングの停止性問題、神の存在証明、宗教学、男性とは何か、女性とは何か、個体発生と系統発生・・・・・・・・。

「岩崎式日本語」に触れる際には、ぜひともこれらの問題のうちなるべく沢山、あるいは碩学の方々にはぜひともこれらの全ての問題を念頭に置いていただけると、大変ありがたいと感じる次第である。

さて、次の日本語文を挙げる。

(1-0) 「私は、この花を、見つめているの」

(2-0) 「私ね、この花ね、見つめているの」

(3-0) 「私は、本を、読んでいるの」

(4-0) 「私、本、読んでいるの」

さしあたり特に重度の心的外傷や言語障害のない日本人がこれらを見たならば、(2-0) と(4-0) とを次のように理解するはずである。

(2-0) → (2-1) 「私はね、この花をね、見つめているの」

(4-0) → (4-1) 「私は、本を、読んでいるの」

岩崎式日本語の考案者である筆者として例外ではない。我々にこの瞬間の判断が可能であるからこそ、いつも靴を履いて外出し、知人たちと会話が可能になるわけである。

「私」と「花」の両方に同じ助詞「ね」が付されながら、あるいは「私」と「本」には何の助詞も付されていないながら、「見つめている」「読んでいる」主体が「私(の目)」であることを瞬時に理解する我々一般日本人の高度な脳機能というものを理解していただ

るだろう。

そして、この瞬時の理解を可能にしているのは、

(X) 『私』や『花』なる単語の意味を知っていること」

ではなく、

(Y) 『私』なる単語の指すものがこの意志を持った動作主体としての自己であり、『花』や『本』なる単語の指すものが意志を持たない植物や物体である、という観念を自動的に発露してしまう脳機能を、成長過程のある時点より有して生きていること」

である。このことが、岩崎式日本語の本質理解のために重要である。なぜならば、岩崎式日本語は、『花』や『本』が意志を持たないとの観念的前提に反駁する文法を有する言語だからである。

一般日本人にしてみれば、(2-0) は (1-0) を「女性的に」言ったものに過ぎず、(4-0) は (3-0) を「子どもっぽく」言ったものに過ぎず、助詞「は」と「を」の「未使用」はあくまでも「省略」であって、動作の主体が「私」、客体が「この花」と「本」であることに変わりはない。

しかしながら、例えば一部の重度の解離性障害者は、そのような判断ができない。このような人は、(Y) のような脳機能を持たないのに (X) であり得る。

解離性障害（特に離人症）や軽中度の統合失調症に罹患した人の多くは、自己意識が崩壊・拡散していながら現実検討能力が失われないことが知られる。つまり、特異点的な「私」（自我）が自覚されずとも、表向きは日本語を理解し、流暢に話すことができる。

ただし、このような人にとっては、(2-0) と (4-0) は、次の意味でもあり得る。

(2-0) → (2-2) 「私をね、この花がね、見つめているの」

(4-0) → (4-2) 「私を、本は、読んでいるの」

このような人の脳と身体にとっては、認知・認識のレベルではなく、感覚・知覚のレベルからして、「(この命ある動物たる) 私」と「(静止した植物たる) この花」とが、主客対立の構図としてとらえられない。

解離性障害（特に離人症や解離性同一性障害）の症状の一つである「主客混淆、自然との一体化、特異点的な自己意識の拡散」は、重症化すると、このように言語とも密接な関

係を築くようになる。「私」たる特異点がないのだから、「私」と「この花」とは実在する主体と客体の名称でさえない。

だが、解離性障害者が(2-0)や(4-0)を日常会話で発したなら、一般の聞き手には(2-1)や(4-1)のように理解されるのであるから、反対にあえて「そのように理解させない」文法を持つ言語が日本の解離性障害者たちのために存在すれば、極めて意義が深いであろうと考え、岩崎式日本語を考案するに至った。

また、「そのような言語であること」を岩崎式日本語に課すことにした。

(2-0)や(4-0)のように、「同じ助詞が付く(または一つも助詞が付かない)名詞は、主体と客体の区別(自己と他者の区別)の概念が消滅して、文中で全く同じはたらきをする」という文法を、岩崎式日本語は持つ必要があった。

「私、この花、見つめているの」

(ぼんやりした私とぼんやりしたこの花が見つめ合っている感じがするの。大自然から抽出されない私の自我にて。)

「私、本、読んでいるの」

(私が本を読み読まれ、本が私を読み読まれ、そしてどちらでもあるの。自己意識の散った私において。)

これこそ、岩崎式日本語の基本構文であり、「識我文(しきがぶん)」または「識格文(しきかくぶん)」と言う。すなわち、岩崎式日本語では、「名詞の羅列(なるべく読点で区切る)」と「述語」の組み合わせが基本であって、羅列された名詞には「主語」と「目的語」との対立がない。

そして、「私(わたし)」と言えば、現代日本語の自己意識であって、なお聞き手に誤解を与えるため、岩崎式日本語では自己意識の範疇を「わ」「わくう」「わしき」などと言い換えることができる。これを「我燈」と呼んでいる。

さらに、「わみこ」(我巫女)を付すと、「~の」なる文末の女性的表現は「わみこ」に内包されるため、「~の」は消失しても構わない。(ただし、付けたままでも構わない。)

「わみこ、この花、見つめている」

「わみこ、本、読んでいる」

動詞の語幹が確定していれば、いかなる活用形であっても、岩崎式日本語ではミスにならない。次はいずれも正しい「識我文」である。

「わしき、この花、見つめていり」(mi-tsu-me が確定)

「わしき、本、読めている」(yo-m が確定)

一般日本人の日本語の命令形においても、変則的活用形のなごりが強く残っている。「おい、読め!」、「こら、そこの〇〇君、しっかり読む!」、「あんた、これ読み!」。

これらは、意味は同じで、話者の性格・性別・方言によって形が異なる。皮肉なるかな、現代の一般日本人が、普段は「言語障害者がやるミスだ」と考えている「ミス」を自ら堂々と犯している好例である。

(英語ではこのようなことは許されず、動詞の変化は、厳格な自己と他者の峻別及びその人数とに制御されている。)

この「ミス」が、識我文では全活用形(未然形～命令形)に許される。

そして、上記の「読めている(読んでいろ=古文:読みてゐろ)」が「命令形とは限らない」と言えるのは、文頭の「わしき」がそれを保証しているからである。そうであるから、「岩崎式日本語話者が文頭で或る『わ〜』を宣言した場合、聞き手は話者のその後の動詞の活用ミスを見逃さなければならない」というのが、岩崎式日本語の「厳格な」ルールである。

「動詞の活用や助詞の使用法を間違えるような心的外傷被害者・言語障害者であっても、『わ〜』などという新単語(名詞)の知識を間違えない」という事態は、若い解離性障害者のみならず、認知症や脳卒中患者でもごく普通に見られるものである。

私は、特に解離性障害かつ言語障害を負った者女性において、「A、幼児期の言語習得過程の逆算にかなっていること」、「B、ジャーゴン失語、錯語など人間が言語を失う過程にかなっていること」、「C、用言の知識と発音のみが崩壊して体言のそれらは失われない日本文化依存型の部分失語の知見に反しないこと」、「D、『わたし』の頭音である『w』をなるべく残すこと」、「E、ヒト(特に女性)の口腔の形状にかなっていて発音が容易であること」などに鑑みて、「わ+接尾語」を導き出したが、実際に、多くの重度の解離性障害者女性は、「わ+接尾語」を誤らずに、既存の日本語の助詞の使い方だけを誤る不思議な事態を呈する。

しかも、名詞は一音たりとも誤らないことが多いのも、不思議であるが魅力的な現象である。

「私ちよ、この花びえ、見つめていますよ」

岩崎式日本語は、このような苦悩を抱えて現代日本語を話す人の「ミス」を「正答」と

してすくい上げることを目的としており、助詞の使用を強要しない。

「わきく、この花、見つめています」

燈詞一覧表に照らせば、「読む」が「読むま」や「読めみ」などと複雑に変化することになっている。例えば、「あ行」を付すと、次のような意味になると別添資料には書いてある。

「読み・ま」・・・「連用（形）抽出言未然（形）。用言に連なる事態への甚大な努力の未だ然らざる心情。」

これは、「読ん・で（読み・て）」を「読み・ま・て」とすると、「読んで」から「読もう」と甚大に努力しても（抽出）、今の私の自己意識にはできない（未然）でいて（連用）」との意味になることを示す。

先に、岩崎式日本語では動詞の活用は自由でミスにならないと書いたが、活用のミスの仕方を追跡した結果を文法化したものが、この「言（げん）」である。

さしあたりこの自己の解離・拡散状態から脱する必要がなく、この状態に安住できている場合には、「心描言」のままでよいが、例えば、家族や知人や上司からの不当な暴言など社会的威圧のある場に出向かざるを得ないなど、やむを得ず解離状態のまま人間関係に自己を投入したり、社会適応しようと苦悩したりする場合には、「う、お、い、あ、え」の五母音の使い分けが許される。

この変化は、現代日本語のいわゆる五段活用の上にさらに五段活用するため、二重活用であるが、恣意的に構築されたものではなく、先の A～E などの追跡と、『万葉集』『古事記』『日本書記』時代から現代日本語までの母音変化の追跡とによって、なるべく解離性障害者らの症状の現状に合うように構築されている。

我燈のうち空我である「わ（くう）」を宣言するということは、自己意識が現代日本人の「わたし」から最も遠く広く拡散していて、苦悩感はほとんど「わ」自体によって保証されている。

さて、次の二文にはこのような違いがあることになる。

「わきゅうら、本、読ん・で（読み・て）・いる」

（自然と一体化した私の自己意識は、生きることの全体・日々の行動の全てについて、社会適応しようとしようと甚大に努力していて、その中で今、本を読んでいるのだけれど、本を読むことは比較的苦痛ではない。）

＝この解離性障害者の唯一の心の拠り所が読書の場合など

「わきゆうる、本、読み・ま・て・いる」

(自然と一体化した私の自己意識は、さしあたり苦痛がなくて、安住しているものの、その中で今、本を読んでいて、本を読むことは比較的苦痛だ。)

=この解離性障害者が急に人前で朗読を頼まれた場合など

さらに、非生命体の「本」にも「言(げん)」を付すことができる。

「わのうら、本・ら、読み・ま・て・いる」

(自然と一体化した私の自己意識は、生きることの全体・日々の行動の全てについて、社会適応しようとしようと甚大に努力していて、その中で今、本を読んでいるのだけれど、本を読むこともその甚大な努力の一環として苦痛であり、本も私に対してひどく頑張っている気がする。)

この解離性障害者の症状が軽い日があったとして、自己意識「わ」がよりいっそう「わたし」に近づき、当人が文頭で「意我」と呼ばれる「わい」を宣言した場合、「本」に「を」を付けることが多くなる。

「わい、本を、読みまている」

(他者や他物体を意図的に制御するくらいにまでなった私の自己意識は、客体・目的・対象物としての本を、甚大な努力により読んでいる。)

ただし、「主我(自我)」である「わたし」にほど近い「意我」や「活我」になると、甚大な努力の必要はほとんどないのであって、多くの場合、「言(げん)」が抜け落ちる。

「わい、本を、読んでいる」

そして、いっそう客体格・対格としての「を」が意識された場合、「わい」に代わって、現代日本語の「主我」である「わたし」が宣言される。

「わたしは本を読んでいる」

こうして、岩崎式日本語の「主我文(主格文)」は、現代日本語に一致する。

ここまで簡単に岩崎式日本語の概要を述べた。これだけで説明し尽くせるものでないことは確かだが、「岩崎式日本語の文法全体のうちの或る特殊な事態が、現代日本語の文法に

一致する」ということを理解していただけたのではないかと思う。